吉川英治

新平家物語　第七卷

みちのく卷

昭和二十七年七月十五日　印刷
昭和二十七年七月二十日　發行

定價　二八〇圓

新・平家物語　第七巻　みちのくの巻

著作者　吉川英治

發行者　杉山胤太郎

印刷所　東京都新宿區市ケ谷加賀町
大日本印刷株式會社

發行所　東京都丸ノ内
大阪市中之島
小倉市砂津
朝日新聞社

みちのくの巻　目次

天狗道場　三
童心一途　一六
山祭り　二三
白粉まだら　三六
大天井　四七
吉次隠し　六〇
花龍膽　七一
昔噺五條の橋　八〇

阿修羅の子　九二
悲　母　一〇〇
雛　一一二
先物買ひ　一二〇
熊　坂　一二九
吉　日　一四三
足柄越え　一五五
草の實黨　一六八
醜女ぜめ　一七八
淺草寺夜泊　一八五
牧の仔馬　一九二
春風坂東歌　二〇六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

昨日の船　二一五
巡りぞ會はん　二二六
比企の局　二三四
枯野の青侍たち　二四三
ゆかり紫　二四九
繼信・忠信　二五九
奇縁と奇なる日　二七〇
烏かご嫌ひ　二八二
黄金曼陀羅　二九一
藤原三代　三〇〇
寒流暖流　三〇八

みちのくの巻

天狗道場

人は云ふ。――僧正ヶ谷には、天狗が住んでゐる。愛宕の太郎坊天狗は、こゝの僧正天狗の御弟子である、と。

どうかすると、そこの谷から夜空へ、雨後の虹みたいな光芒が雲間をつらぬいてゐるのを見かける事があらう。あれは國々の諸天狗が會同して、天狗の宴をしてゐるのだ。

そして、天狗の鼻は、人間の匂ひに敏感だから、人間が近寄るとすぐ知つてしまふ。

ゆめ、その畋は、谷を覗くことではない。

近づくと、祟りをうけるぞ。大木の宙に吊るし上げられたり、八ツ裂にされて拋り捨てられた者もあるぞ。

（――天狗風が吹いたら、鞍馬一里四方は、戸を閉めろ。戸を閉めて、じつとして居るに限る）

天狗傳說は、古くからこの地方にも、こんなふうに、云はれて來た。

里人は今もその實在を信じてゐる。子を叱るにも、「天狗樣が來るぞ」と云ひ、草木の異變を見ても「天狗樣が通つた」とか、「天狗樣が怒つた」とか云つて、怖れるのであつた。

殊に、僧正ヶ谷の天狗は、諸天狗のうちでも氣性が荒々しく、その神通力を以て、岩石を飛ばし、大木を引き裂き、「お氣に入らぬことがあると、里まで石を降らせたり、魔王堂の瀧を、わざと里の畑へ押し流して來る」などと、そこを魔界のやうに思ひこんでゐる。

然し、さうした傳說に附會して、

(谷を覗くな)

と、里人のあひだに、殊さら、恐怖心理が昂められたのは、考へてみると、ごく近年の事でもあつた。何者かの作爲と思はれないこともない。

現に、今夜もである。その僧正ヶ谷の谷底には、天狗と云へば云へるやうな一群が見える。それは黑々と一つ所に寄るかと思へば、木の葉のやうに別れ散つたり、また囁き合つたり、走つたり、異樣な離合集散を描いてゐるのだつた。

『おい、箱王。まだお見えにならぬか』

『お見えになりません』

『ちと、遲いなあ』

『いや今夜は、われ等の方が、早目に來たのでせう。……月はまだあの邊ですから』

かりに天狗としておかう。

箱王と呼ばれた小天狗は、月の位置を指さした。黑々と、あたりに立つてゐる諸天狗も、同じやうに空を仰ぐ。

奇岩亂峭のそゝり立つ谷底のせゐか、月は小さく見え、世間で見るのとは、違ふ月みたいに見えた。

『では、もう一と話し話して居ようか』

あたりに散らばつてゐた諸天狗は、かう云つた天狗の周りに寄り集まつた。思ひ思ひにそこらの岩石に腰をかける。どこかを行く奔流の音と岩鳴が、この奇怪な群れを吹き拔けてゆく。

『さて、こよひ限りで、こゝの集りも、終りだが』

『いや、おれ共は、いつでも寄れるが、陸奥の秀衡どのとの謀し合せは、なほ一年も、待たねばならぬ』

『吉次は、今年も待てと云ふ。時機まだ早いとばかり云ふ。……だが、おれ共にとれば、その一年の長さといつたらない。もし、あと一年を待つ間に、事を平家に覺られたら、十年の苦心も水の泡だ』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

『とやかくと、一年延ばしに、待て待てとばかり云ふ吉次も少し疑はしいぞ。彼と秀衡殿との間に、眞實、諒解があるのか何うか』

『さうだ。さうも疑へないことはない』

一人の天狗が、相槌を打つた。言葉をつよめて、その天狗は云ふのである。

『陸奥には、源氏に好意をよせてゐる人々が多い。それは源家中興の祖八幡殿（義家）からの山縁に依る。――けれど、いまの藤原秀衡どのと平家とは決して惡い仲とはいへぬ。――むしろ秀衡どのとは、共に榮えを成さんといふ盟約があるといつてもよいだらう』

『さうかしら……。そこは分るまい』

誰かが呟く。

默つてゐる天狗の面々にも、一抹の不安が漂ふ。彼らの重大な關心は今、平家と奥州藤原氏との間が相協的か對立的か、その一事に懸かつてゐるらしい。

もし、和協的ならば、藤原秀衡を恃む望みはうすい。が、對立的ならばおもしろい。秀衡に據る將來には、明るい希望が持てやうといふのである。

然し、その秀衡に疑念をもつ天狗は、他の天狗たちの希望的な考へを暗いものにした。

『よく考へてもみるがいゝ。――陸奥ノ人藤原秀衡ヲ征夷大將軍トナス……といふ任命があつた

のは、二年ほど前ではないか。今日此頃では、入道相國がうんと承知せねば、いかなる者の敍任昇官も行はれぬと云はれてゐる。秀衡どのと平家との親交は、それ一つを見ても分りきつたことだ』

『いや、その見方は淺いだらう。ちと早計な云ひ方ぞよ』

一天狗が、反駁した。

『あの敍任は、清盛の一策に過ぎぬ。心から秀衡どのと好いわけではない。清盛はかの大輪田の築港にも、また厳島の造營にも莫大な費用をかけて來た。その財政策から、陸奥の砂金を献じさせる手段として、征夷大將軍を與へたものにちがひない。いはば交換條件だし、清盛の外交なのだ。秀衡どのとて、覺らずにゐるものか。權勢並び立たず。肚の底では、兩者は對立してゐるとおれは觀る』

『いみじくも云はれたぞ』

と、ほかの天狗もみな、それに雷同した。

『鎌田の説の方が正しさうだ。ともあれ、やがて金王丸が見えたら、昨夜の評議について、吉次が何と申したか、最後の返答も聞けるであらう。めつたにも動けぬが、さりとて近づく機運を前に、徒らな懐疑やためらひも、いゝ事ではない。吉次の返答如何によつて、またおれ共の肚は肚

で極めたがいゝ』

その時、遠くで、見張の役をしてゐた箱王の影が、斷崖の中腹から谷をのぞいてゐた。そして、

『見えましたぞ。遠くに、和子様がお見えですぞ』

と、下の諸天狗へ呼ばはつた。

まるで猿か、むさゝびのやうだ。

道もない傾斜の急を、ザヽ、ザヽ、と木の枝にぶら下がつたり岩にすがつて、そこに道があるかの如く、下へ向つて降りて來る人影がある。

『……』

天狗たちは、立ち竝んだまゝ、ひそとして、見恍れてゐた。

(われ等の和子様。われらの珠寶)

と、その眸は、自分たちの仰いでゐるものへ、陶醉してゐるやうだつた。

月光に濡れてゐる斷崖の肌は、その樹葉や露が搖れるので、かなり高い所の人影だが、それが次第に降りて來るのまで鮮らかに分つた。——その一つの影が、一つの人影へ云つてゐた。

『おうい、金王。今夜はへんな所へ出たぞ』
『やあ、下には、凄まじい水音がいたしますな。これはいけません。魔王堂のそばの瀧壺でせう』
『下は、瀧つぼか』
『お怪我でもあつては大變。どこか、ほかの降り場所を探しませう』
『あれ見ろ。皆はもう來て待つてゐる。降りられぬことがあるものか』
『めつさうもない、そんな所から』
『そなたは、ほかを廻れ。わしはこゝを跳ぶ——』
云ひ出したらきく和子ではない。金王丸はむだ口をもう止めた。
灌木の根にすがつて、覗きこむと、二丈餘りの削ぎ立つた絶壁の下に、岩を嚙む急流の白い飛沫と、そして巨大な岩盤と岩盤とに抱かれてゐる淵が望まれた。
『あつ、和子様。おあぶない』
金王丸がさう云つた時は、牛若の體は、もう絶壁の一角を離れてゐた。胡桃か柏か知れないが、一つの木の枝につかまつて、宙に浮きながら、次に移る木を、脚の先で探りまはすのであつた。
『金王。かうやればいゝんだよ』
牛若は、宙で云ひながら、弓のやうに撓む梢の彈力を利用して、ほかの木へ足のさきを絡んだ。

そして前の枝をパッと手から離す。

金王丸には、さうは行かない。木から木へ移るには、さん〴〵に飛び惱んだ。

『下手だなあ、金王は』

牛若は、一つの木の股で、笑つて見てゐた。何か、からかひたげな笑靨である。

十五歳にしては、體が小さい。

頰も豐かとは云へないし、四肢も細ッこい方である。總じて、發育のいゝ體質ではない。

思ふに。

彼が生まれたのは、平治の合戰の中だつた。その母さへ、朝夕の食にも困り、飢寒と恐怖の夜夜日々に追はれてゐた。その子の齊は、母の甘い乳に滿ち足りたことがない。

また、鞍馬に預けられてからの後は。

あたゝかい父母の肌を知らずに來たのはもちろんである。粗食粗衣は云ふまでもない。泣けば泣きつ放し、尿をすれば濡れたまゝ。無心な魂のうちからすでに小さき囚人だつた。

これが、豐頰の美少年として生ひ育つわけはない。ほかにも數多な稚子はゐたが、遮那王ほど、育ちの惡い子はなかつた。

稚子仲間にも苛められた。——物心ついてからは、堂衆や學生輩にも、おもちやにされたり、

懲らされたり、とにかくよく十五まで育つて來たと云ふほかはない。

然し、人間の上にある天意といふか自然といふか、或る一つの宇宙の意志は公平である。

この子には、このやうに、父母との緣も、乳も食も、肉體的な幸福は、何ひとつ人なみに與へなかつたが、それに耐へ得る强靱な意志と智とをさづけてはゐた。——いや、環境が自ら作つて來た生命力と云つてもよい。

何しろ〝きかんぼ〟なのだ〝負けずぎらひ〟なのだ。

癇症で激しやすいが、また泣き蟲でもある。泣くときは、人の居ない所へ行つて、山にも谿するやうな聲で、獨りでオイ〳〵泣いて來る。

『猿か啼くのかと思うたら、遮那王であつたよ』

遮那王の泣き谿といへば、いつも山の笑ひばなしになつてゐた。彼の泣き谿を聞かうぢやないかと、わざと泣かせたりする荒法師だつた。

鞍馬寺は叡山の管下であり、叡山末派の一寺である。小規模ながら、僧兵組織をもち、武器庫などもあることは、山門や南都のそれと違つてゐない。

從つて、猛氣の僧が多い。稚子たちは、學問所で一定の教育と躾をうけるが、中で拔群なのは牛若だつた。いやそれ以上、彼が好んだのは、僧兵たちのやつてゐる武技の見やう見眞似であつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.